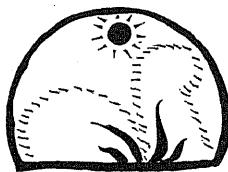


蜻蛉の魅惑



—詩人グランゴワールの幼時の想ひ出—

讀者諸君も嘗ては少年であつたであらう、恐くは今一度さうあり得たならば幸福だと思ふに違ひない。私自身もこの少年時代を、毎日最も有效地費したのであるが、諸君はたゞく、麗らかな日、清水の流れる小川の岸を、急な曲り角で翅を毀したり、或は小枝に接吻して、そここゝと飛びまわる青色や緑色の美しい蜻蛉の跡を逐つて、叢から叢へ駆け廻つたことがあるに違ひない。紫色と碧色の翅をはばたきさせながら、風を切つて浮遊してゐるこの小さな渦巻のやうな感じのする蟲に、諸君は身も心も奪はれて、好奇の眼を注いだことを想ひ出すだらう。その駆ける速さに眩されて、翅のはばたきの中には、何とも捕へやうのない形のものが現れてゐると思つたに違ひない。この翅の顛動の中に、もやくした陽炎のやうな形を見るこ、諸君は

夢のやうな幻のやうな、觸ることも見ることも出來ないものがあるやうに思つたに相違あるまい。が、遂に蜻蛉が葦の葉末に止るこ、諸君は息を殺して、その長い紗のやうな翅や、エナメルのやうな體や、水晶のやうな眼を見つめた時、その驚きは何に喩へやうもない位であつただらう。そして、蜻蛉の體がまた影のやうに空中に飛び去つて、それが夢の中のものになつてしまふことを恐れる氣持は、さんなであつただらうか。

春陽堂世界名作文庫

ユーポー作、ノートルダムの怪異（前篇一五一頁）
ユーポー三部作（レ・ミゼラブル、海の勞働者）

ノートルダムの怪異の一